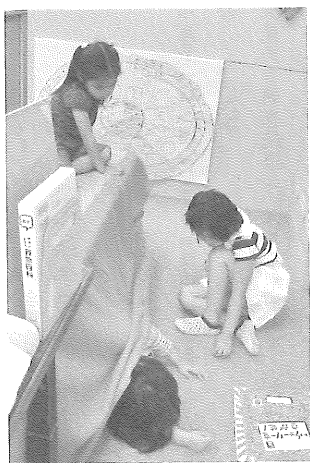


保育の現場から

ほけんしつ

渡邊 満美



私の勤めている幼稚園の保健室は、園の中で唯一靴を脱いで入るじゅうたんの部屋です。靴を脱いで入ると、そこに少し座りたくなるような雰囲気がある気がします。保健室は、園の図書室も兼ねているので、本を読みにくる子どももいます。けがをした子ども、本を読みに来た子ども、ちょっと過ごしたい子どもが一緒になって、保健室で過ごしています。養護教諭の私は、そんな保健室で子どもたちと出会います。

保健室は、園の中で子どもたちが自分で選ぶことのできる場所の一つです。子どもたちは「今日はここで」「今は一人でいたい」「誰かに気持ちを受け止めてほしい」など、さまざまな思いで過ごしています。クラスの枠を越えて集まった子どもたちが、保健室で出会った人とかかわり、安心感や自信をもとに、クラスでも自分らしく過ごせるようになるためにも、保健室の中でのかわりを支えていくことが必要だと考えています。

思いを受けとめ、自分と出会う

R子とN夫が、仲良く一つの本を見ている姿がありました。学年も違うし、一緒にいることなどない二人だったので少し驚きましたが、二人共が好きな本だと気づき、様子を見ていました。二人はしばらく仲良く本を見ていましたが、途中でページがずれ始めました。そこで私は、二人と一緒に本を見始めました。中に入ると、R子のページにN夫が合わせているのを感じました。N夫が「どうして、そうやっ



ちゃうの！」と言って怒りだしました。「もうやめた！」と言って立ち上がり「そんなことはいけないんだ。僕はもうやらないよ、一人でやればいいんだ、僕は遊んでくる」などと言いながら、保健室を出て行きました。N夫が言っている間、R子は黙ったまま本のほうを見て、N夫の言葉を聞いていました。R子の目が動かず、体はかたまっていました。心はN夫に向けられているのを感じました。N夫が出ていった後、R子は何も言わず、私の顔をのぞき込みました。私は、R子の思いを受けうなずきました。しばらくして、R子は本に目を落とし、再び見始めました。すると、N夫が戻ってきて、何も言わずR子の隣に座り、また静かに二人は本を見始めました。R子の体が少しゆるみ始めたように感じました。何事もなかったように、楽しい雰囲気に戻っていました。

黙って相手を受けとめたR子、言ってしまった自

分を受けとめ、この場に戻ってきたN夫、ほんの一時、いろいろなことを二人は感じたと思います。相手を思い、気持ちを合わせると、何があっても楽しく過ごしていける姿を見たような気がしました。

人を通して、自分に向きあう

最近、T夫は一人で保健室に来ることがあります。私はT夫のことが気になっていのですが、近づくとさっと逃げてしまうのです。しかも、T夫が過ごす場所は保健室の入口です。このままではT夫との距離も近づかないし、T夫にとって居場所の保証とも違うことをしていると思うようになりました。そこで、入ってきた時と、出ていく時にだけ「この場所においても大丈夫」という思いを込めながら必ず声をかけ、目を合わせるといふかかわりを選びました。でも私の中では、T夫自身が自分の状況と向き合うような環境だろうか、居場所の保証をすること

だけでいいのだろうか、という葛藤もありました。

その日、T夫は珍しく、私が過ごす場所の近くにあるソファで本を読んでいた。私はほかの子どもたちと過ごしながら、今日は声をかけようと思いましたが。ふと気づくと、K夫がT夫と同じソファに座って、私に何か言い始めたのです。K夫は「つまらないんだ。だって、S夫もR夫も行っちゃって、M子ちゃんも……」と言うのです。私は「そうなんだ。まあ、でも……そんな時もあるのよね」と言いながら、すぐ横にいたC子に「そんな時、C子もあったんじゃない？」と聞くと、「ない」という返事です。そこで、T夫に聞くと「あるよ」と答えたのです。K夫も（私も）全身で聞いていました。T夫に「そんな時は、どうするの」と聞くと、「ふらふらして、いろんな人が何やっているか見たり、部屋にいたり、ここで本を読んだりね」と、いろいろな過ごし方をしているとT夫は答えたのです。

R夫は黙って聞いていました。

T夫は今の自分とちゃんと向き合っていました。

言葉にしてほかの人に伝えられるほど、そのことを意識したり、考えたりしていることを感じました。

他人に伝えたいつもりの言葉は、もう一度自分に響いたのではないかと思います。ここから、また一つT夫の人とかかわり方も変化するかもしれないと感じました。

場所を選び、出会い直す

A子が保健室をのぞいているのに気づきました。

私は少し遠くから、「おはよう」と声をかけてみました。靴を脱いで近づいてきて、隣にピタッと寄りてきたのです。何も言わないで隣にいます。そして、立ちあがり、テーブルの瓶にある髪どめを全部取り出し「つけてー！」と言うのです。前に一緒につけたことがあります。けがの対応やほかの子ども

たちと過ごす時間を考えると、この時間だけがA子とていねいにかかわれる時間かもしれないと思いつ緒に過ごしました。

私A子の髪に、髪留めをつけ終わると、鏡を見て満足げな様子でした。A子は、しばらく鏡の前で何かしていました。私は、A子がまだ、何か満たされていなのを感じました。そこに担任の先生が来て、A子と少し話して、二人は保健室を出て行きました。

保育後、担任の先生とA子の話をしました。A子は鏡の前で「来てくれると思った」と先生に言ったそうです。A子は、ここなら見つけてもらえる、かわってもらえるという場所に保健室を選んでいました。

保育室と保健室をつなぐ

三歳児R夫との最初の出会いは、R夫が足を痛が

り激しく泣き、保健室に行くことを嫌がるので、担任に呼ばれ、保育室に行った時でした。

その数日後、保健室の前にできたお店にR夫と担任が来ていました。保健室からのぞいていたら、R夫と目が合いました。その次の日から、登園後すぐ毎日のように顔を出すようになりました。四〜五歳児が多く過ごす保健室で、三歳児が過ごすのはちょっとドキドキのはずが、迷いなく部屋に入り過ごしていました。しかし数日すると、周りが見えてきたのか、入口で保健室をのぞいて様子を見てから入るという数日がありました。

そんなある日、突然、保育室のブロックで作ったものを保健室に持ってきました。最初は自分の近くに置いていても途中で忘れ、それでも平気でした。しかし、毎朝保育室で作ってくるそのブロックがだんだんと大切なものになっていました。途中壊されたり、取られたり、悲しい思いもしていました。少

したところ、保健室の同じ所に置いて入るようになったのです。置き場所は、ちょっと背伸びをして置く、ほかの子どもに取られない安心な所でした。

でも、何よりその場所は、保健室に入ってくる時も見えるし、入っていても見える場所でした。ブロックを持つてくることも、置く場所も、保育室と保健室をつなげているかのように感じました。

ブロックを持つてきてからは、しだいに保健室にいる時間が短くなっていきました。何かをきっかけに保健室を出ると、そのまま遊ぶという姿があり、いつの間にか、保健室に顔を出さない日が続きました。

私も何となく寂しくなったある日、友達と一緒にR夫が保健室に来ました。R夫は、保健室があることを確認しているかのように、ここで過ごしていたことを思い出しているかのように、この場所を友達に知らせているかのように、保健室を一周して出て

いきました。今は時々、一緒に来た友達がR夫を探しに、保健室をのぞくことがあります。私にとってはまた、新しい出会いです。

R夫は保育室と保健室をつなぐ姿を私に見せてくれました。どの子どもたちも、自分自身で自分の過ごす空間をつなげようとしていることに改めて気づかされたのです。子どもたちの表現には、もっと気づかなくてはいけないことが隠されていると思わされました。

私にとって、保健室はとても大切な居場所です。その居場所が大切になると、保健室のない他園の養護教諭たちの声も聞こえ始めるようになりました。職員室の一角が保健コーナーとなっていて、そこで子どもたちと出会う養護教諭、「動く保健室」と救急カバンを持って子どもたちと過ごす養護教諭もいるようです。保健室のない養護教諭の役割が何なの

かわからないという声もありました。

保健室のあることが当たり前で過ごしてきた生活だったのが、保健室のない園があることを知りながら過ごす生活になりました。幼稚園にある保健室にどんな意味や役割があるのだろうかと考えようになりました。そして、養護教諭が幼稚園にいる意味を考えるようになりました。

毎月の誕生会の中のひとこまです。司会の先生が「先生の中にも誕生日の人がいます。職員室にいる先生です」と言うと、何人かの子どもたちが「まみ先生」と言っている声が聞こえました。しかし、私の近くで一人の女の子が小さな声だけれども、はっきりと「違うよね、まみ先生がいる所は保健室だよ」と言いました。私にとっては、その声がとてもうれしく響きました。

(お茶の水大学附属幼稚園養護教諭)